

化銀杏

泉鏡花

青空文庫

貸したる二階は二間にして六畳と四畳半、別に五畳余りの物置ありて、月一円の極なり。
 家主は下の中の間の六畳と、奥の五畳との二間に住居いて、店は八畳ばかり板の間になり
 おれども、商売家にあらざれば、昼も一枚藪をおろして、ここは使わずに打捨てあり。

往来より突抜けて物置の後の園生まで、土間の通庭になりおりて、その半ばに飲井
 戸あり。井戸に推並びて勝手あり、横に二個の竈を並べつ。背後に三段ばかり棚を釣り
 て、ここに鍋、釜、播鉢など、勝手道具を載せ置けり。廁は井戸に列してそのあわい遠
 からず、しかも太く濁りたれば、漉して飲用に供しおれり。建てて数十年を経たる古家な
 れば、掃除は手綺麗に行届きおれども、そこら煤ぼりて余りあかるからず、すべて少しく
 陰気にして、加賀金沢の市中にてもこのわたりは浅野川の河畔一帯の湿地なり。

園生は、一重の垣を隔てて、畑造りたる裏町の明地に接し、李の木、ぐみの木、柿の木
 など、五六本の樹立あり。沓脱は大戸を明けて、直ぐその通庭なる土間の一端にありて、
 上り口は拭き込みたる板敷なり。これに続ける六畳は、店と奥との中間にて、土地の方

言茶の室と呼べり。その茶の間の一方に長火鉢を据えて、背に竹細工の茶棚を控え、九谷焼、赤絵の茶碗、吸子など、体裁よく置きならべつ。うつむけにしたる二個の湯呑は、夫婦別々の好みにて、対にあらざ。

細君は名をお貞と謂う、年紀は二十一なれど、二つばかり若やぎたるが、この長火鉢のむこうに坐れり。細面にして鼻筋通り、遠山の眉余り濃からず。生際少しあがりて、髪はやや薄けれども、色白くして口許緊り、上気性と見えて唇あれたり。ほの赤き瞼の重げに見ゆるが、泣はらしたるとは風情異り、たとえば炬燵に居眠りたるが、うつとりと覚めしもののごとく涼しき眼の中曇を帯びて、見るに佛晴やかならず、暗雲一帶眉宇をかすめて、渠は何をか物思える。

根上りに結いたる円髻の鬢類に乱れて、下メ《したじめ》ばかり帯もめめず、田舎の夏の風俗とて、素肌に紺縮の浴衣を纏いつ。あながち身だしなみの悪きにあらず。

教育のある婦人にあらねど、ものの本など好みて読めば、文書く術も拙からで、はた裁縫の業に長けたり。

他の遊芸は知らずと謂う、三味線はその好きの道にて、時ありては爪弾の、忍ぶ恋路の音を立つれど、夫は学校の教授たる、職務上の遠慮ありとて、公に弾くことを禁じたれ

ば、留守の間を見計らい、細棹ほそざおの塵ちりを払いて、慎ましげに音々《ねじめ》をなすのみ。

お貞は今思出したらむがごとく煙管きせるを取りて、覚束おぼつか無げに一服吸いつ。

渠かれは煙草たばこを嗜たしなむにあらねど、憂うきを忘れ草というに頼りて、飲習のんじゆわんとぞ務むるなる、深く吸いたれば思わず咽むせて、落おすがごとく煙管きせるを棄すて、湯吞とうどんに煎茶せんぢやをうつしけるが、余あまり沸たぎれるままその冷さむるを待てり。

時に履物うらちの音高く家うちに入来いりくるものあるにぞ、お貞は少し慌あわだしく、急に其方そなたを見向ける時、表の戸をがたりとあけて、濡手拭ぬれてぬぐいをぶら提げつつ、衝つと入りたる少年あり。

お貞は見るより、

「芳さんかえ。」

「奥様おくさん、ただいま。」

と下駄げたを脱ぐ。

「大層、おめかしだね。」

「ふむ。」

と笑い捨てて少年は乱暴に二階に上るを、お貞は秋波ながしめもて追懸けつつ、

「芳ちゃん！」

「何？」

と顧みたり。

「まあ、ここへ来て、ちつとお話しなね。お祖母様ばあさんはいま昼寝をしていらつしやるよ。騒々しいねえ。」

「そうかい。」

と下りて来て、長火鉢の前に突立ち、

「ああ、喉のどが渴く。」

と呷つぶやきながら、湯呑たまに冷したりし茶を見るより、無遠慮に手に取りて、

「頂戴。」

とばかりぐつと飲みぬ。

「あら！ 酷ひどいのね、この人は。折角冷しておいたものを。」

わざと怨えんずれば少年は微笑ほほえみて、

「余つてるよ、奥様はけちだねえ。」

と湯呑を返せり。お貞は手に取りて中を覗のぞき、

「何だ、けも残しやアしない。」

と底の方に残りたるを、薬のように仰ぎ飲みつ。

「まあ、芳さんお坐ンな、そうしてなぜ人を、奥様々々ツて呼ぶの、嫌なこツた。」

「だって、円鬚に結つてるもの、銀杏返の時は姉様だけれど、円鬚の時や奥様だ。」

二

お貞はハツとせし風情にて、少年の顔を瞻りしが、腫ぼったき眼に思いを籠め、

「堪忍おしよ、それはもう芳さんが言わないでも、私はこの通り髪も濃くないもんだから、自分でも束ねていたいと思うがね、旦那が不可ッて言うから仕様がなのよ。」

「だからやつぱり奥様じゃあないか。」

と少年は平気なり。お貞はしおれて怨めしげに、

「だって、他の者なら可いけれど、芳さんにばかりは奥様ツて謂われると、何だか他人がましいので、頼母しくなくなるわ。せめて「お貞さん」とでも謂っておくれだと嬉しいけれど。」

とためいきして、力なげなるものいいなり。少年は無雑作に、

「じゃあ、お貞さんか。」

と言懸けて、

「何だか友達のように聞えるねえ。」

「だからやつぱり、姉さんが可いじゃあないかえ。」

「でも円鬚に結ってるもの、銀杏返だと亡^{なく}なつた姉^{ねえさん}様にそっくりだから、姉様だと思^うけれど、円鬚じゃあ僕は嫌だ。」

と少年は素^{そっけ}気なし。

「じゃあまるであかの他人なの？」

「なにそうでもないけれど。……」

少年は言^い淀^{よど}みぬ。お貞は襟^{かき}を搔^{あわ}合せ、浴衣の上前^{ひつぱ}を引張りながら、

「それだから昨日^{きのう}も髪^{かみ}を結^むわない前に、あんなに芳^{よし}さんにあやまったものを。邪^{じゃ}慳^{けん}じゃあないかね。可^いよ、旦那^{だんな}が何^{なに}といつても、叱^{なぐ}られても大事な^{だいじな}いよ。私^{わたし}やすぐ引^ひ毀^{こわ}して、結直^{むす}して見^みせようわね。」

お貞は顔^{かほ}の色尋^た常^だならざりき。少年は少し弱^{よわ}りて、

「それでなくツてさえ、先^こ達^{ないだ}のような騒^{さわ}がはじまるものを、そんなことをしようもんな

ら、それこそだ。僕アまた駈出して行かにはやあならない。」

「ほんとうに、あの時は。ま、どうしようと思つたわ。」

芳さんは駈出してしまつて二晩もお歸りでないし、おばあさんはまた大變に御心配遊ばしてどうしたら可からうとおつしやるし、旦那は旦那でもものも言わないで、黙つて考え込んでばかりいるしね、私はもう、面目ないやら、恥かしいやら、申訳がないやらで、ぼうツとしてしまつたよ。後で聞くと何だつき、真蒼になつて寝ていたとき。

芳様の蹙音が聞えたので、はツと気が着いて駈出したが、それまでどうしていたんだか、まるで夢のようで、分らなかつたよ。」

少年は頻りに頷き、

「僕はまた髯がさ、（水上さん）て呼ぶから、何だと思つて二階から覗くと、姉様は突伏して泣いてるし、髯は壇階子の下口に突立つてて、憤然とした顔色で、（直ぐと明けてもらいたい。）と失敬ことを謂うじやあないか。だから僕は不愉快で堪らないから、それからそのまんまで、家を出て、どこか可い家があったらと思つたけれど、探す時は無いもんだ。それから友達のところへ泊つて、牛を奢つてね、トランプをして遊んでいたんだ。僕あ一番強いんだぜ。滅茶々に負かして悪体を吐いてやると、大變に怒つてね、と

うとう喧嘩けんかをしちまったもんだから、翌あくる晩ばんはそこに泊ることも出来ないの、仕方が無いから帰って来たんだ。」

お貞は聞きつつ睨にらむ真似して、

「憎らしいねえ。人の気も知らないで、お友達とトランプも無いもんだね。気が違やあしないかと、私や自分でそう思った位だのにさ。」

「でも僕あ帰った時、（芳さん！）てつて奥から出て来た、あの時の顔にや吃驚びっくりしたよ。暮合くれあいではあるし、亡なくなつた姉さんの幽霊かと思つた。」

「いやな！ 芳さんだ。恐いことね。」

お貞は身震いして横を向きぬ。少年は微笑ほほえみたり。

「何だ、臆病おくびような。昼じやあないか。」

「でもそんなことをお言いだと、晩に手水ちようずに行かれやしないや。」

「そんなに臆病な癖にして、昨夜ゆうべも髻と二人連づれで、怪談を聞きに行ったじゃあないか。」

お貞はまじめに弁解いいわけして、

「はい、ですから切前きりまえに帰りました。切前は茶番だの、落語だの、そりやどんなにかおもしろいよ。」

「それじゃもう髯の御機嫌は直ったんだね。」

三

「別に直ったというでもないけれど、まああんなものさ。あれでもね、おばあさんには大變氣の毒がつてね、（お年寄がようよう落着おちつきなされたものを、またお転ひっこし宅は大抵じゃアあるまいから、その内可い処があつたら、御都合次第お引越しなさるが可し、また一月でも、二月でも、家うちにおいでになつても差支えはございませんから）ツて、それツきりになつてるのよ。そのかわりね、私にや、（芳さんと談話はなしをすることは決してならない）ツて、固かたくいいつけたわ。やつぱり疑うたがぐつてゐるらしいよ。」

少年は火箸ひばしを手にして、ぐいぐい灰に突立てながら、不平なる顔かおつき色にて、

「一体疑うたがぐるツて何だろう。僕のおばあさんにもね、姉ねえさん様、髯ひげが、（お孫さんも出世前からだの身体だから、云々うんぬんが着いてはなりませんまい。私は、私で、内の貞に氣を着けますから、あなたもその処おぬかりなく。）ツさ。内証で言つたそうだ。變じやないか、え、姉様、何を疑うたがぐつてゐるんだらう。何か僕と、姉様と、不道德な關係があるとでもいうことなん

かね、それだと失敬極まるじやあないか、え、姉様。」

と詰り問うに、お貞は、

「ああ。」

と生返事、胸に手を置き、差俯向く。

少年は安からぬ思いやしけむ。

「じゃあ何だね、こないだあの騒ぎのあつた前に、二人で奥に談話をしていた時、髯が戸外から帰つて来たので、姉様は、あわアくつて駈出したが、そのせいなの？ 一体気が小さいから不可いよ。いつに限らずだ。人が、がらりと戸を開けると、何だか大変なことで見付かつたように、どぎまぎして、ものをいうにも呼吸をはずまして、可訝いだろうじやないか。先刻僕の帰つた時も、戸をあけると、吃驚して、何だかおどおどしておいでだつたぜ。こないだの時だつてもそうだ。髯に向つて、（いらつしやいまし）自分の亭主を迎えるつて、（いらつしやいまし）なんて、言う奴があるものか。何だつてそう気が小さくつて、物驚きをするんだなあ。それだから疑ぐられるんだ。不可ねえ。」

お貞は淋しげなる微笑を含み、

「そういつてながら芳さんもあの時はやつぱりそそツかしく、二階へ駈け上つたじやあな

いかね。」

少年は別に考うる体もなく、

「そりや何だ、僕は何も恐いことはないけれど、あの髻が嫌だからだ。何だか虫が好なくツて、見ると癩に障るつちやあない、僕あもう大嫌だ。」

と臆面もなく言うて退けつ。渠は少年の血氣にまかせて、後前見ずにいいたるが、さすがにその妻の前なるに心着きけむ、お貞の色をうかがいたり。

お貞は氣に懸けたる状もなく、かえつて同意を表するごとく、勢なげに歎息して、
「誰が見てもちがいはないねえ。私だつてやつぱり嫌だわ。だがね、芳ちゃんは、なぜ好かないの。」

少年はお貞の言の吾が意を得たるに元氣づきて、声の調子を高めたり。

「他にね、こうといつて、まだ此家へ来て、そんなに間もないこつたから、どこにどうと
いう取留めたこともないけれど、ただね、髻の様子がね、亡なつた姉様の亭主に肖てい
からね、そのせいだろうと思うんだ。」

「そうして、不可いお方だつたの。」

少年はそぞろに往時を追懷すらむ、慨然としたりけるが、

「不可いどころの騒さわじやない、姉様を殺した奴だもの。」

お貞は太いたく感かぜし状さまにて、

「まあ。」

とそのうるみたる眼を睜みはりぬ。

「酷ひどい人ね、何だツてまた姉様を殺したんだらうね。芳さんのお姉様あねえさんなら、どんなにか優

しい、佳いい人だつたらうにさ。」

「そりや、真ほん実に僕を可愛がつてくれたツちやあないよ。今着ている衣服きものなんか、台な
しになつて居るけれど、姉様がわざと縫よつて寄来よこしたもんだから、大事にして着ているんだ
。」

「そのせいで似合うのかねえ。」

とお貞は今更のごとく少年の可憐なる状さまぞ瞻みまられける。水上芳之助は年とし紀十六、そのい
う処、行いう処、無邪気なれどもあどけなからず。辛苦のうちに生おいたちて浮世うきよを知れる状見
えつ。もののいいぶりはきはきして、齡よわのわりには大人びたり。

四

要なければここには省く。少年はお蓮れんといえりし渠かれの姉が、少わかき時配偶を誤りたるため、放蕩ほうとうにして軽薄なる、その夫判事なにかしのために虐遇され、精神的に殺されて入水して果てたりし、一条の惨話を物語りつ。語は簡ことばに、意は深く、最もものに同情を表して、動かされ易きお貞をして、悲痛の涙に咽むせばしめたり。

語を継ぎて少年言う。

「姉様ねえさんもやつぱり酷ひどいめにあわされるから、それで髻ひげが嫌なんだらう。」

折からぶつぶつと湯の沸にえかえ返りて、ぱつと立ちたる湯気に驚き、少年は慌あわただしく鉄瓶てつびんの蓋ふたを外し、お貞は身を斜ななめになりて、茶棚あかがねより銅の水差を取下して急がわしく水を注さしつ。

「いいえ、違うよ。私のはまた全く芳さんの姉さんとは反あちこち対で、あんまり深切にされるから、もう嫌で、嫌で、ならないんだわ。」

少年は太いたく怪あやしみ、

「そんな事つちやアあるもんでない。何だつて優しくされて、それで嫌だというがあるものか。」

「まあさ、お聞きなね。深切だといえは深切だが、どちらかといえは執しつこ着的しつこなのだわ。かい

つまんで話すがね、ちよいと聞賃をあげるから。」

と菓子皿を取とり出して、盛りたる羊羹ようかんに楊枝ようじを添え、

「一ツおあがり、いまお茶を入替えよう。」

と吸子の茶殻を、こぼしにあげ、

「芳ちやんだから話すんだよ。誰にも言つちや不可いけいよ。実は私の父おとっさん親おとっさんは、中年から

少し気が違つたようになって、とうとうそれでおなくなりなすつたがね、親のことをいう

ようだけれど、母おつかさん様様は少し了りよう簡けん違ちがいをして、父おとっさん親おとっさんが病氣のあいだに、私には

叔父おじいさんだ、弟あにごと関く着ついたの。

するとお祖父おじいさんのお計けいらいで、私が乳ち放はなれをするとすぐに二人とも追出おして、御自分

で私を育てて、十三の時までお達者たつだつたが、ああ、十四の春はるだつた。中風ちゆうふうでお悩なみな

すつてから、動くことも出来なくおなりで、家うちは広ひろし、四方あきちは明地あきちで、穴あなのような処ところに住

んでたもんだから、火事かじなんぞの心配しんぱいはないのだけれど、盗賊どろぼうにでも入いられたら、それ

こそどうすることもならないのよ。お金子かかねも少々せうじやうあつたそうだし。

雇おいの婆ばあさんは居いたけれど、耳みみは遠とほいし、そんなことの助けたすけにやならず、祖父おじいさんの看

病びやうも私一人では覺おぼ束つかなし、確たしかな後見あきをとといた処ところで、また後見あきなんていうものは、あと

でよく間違が出来るものだから、それよりか、いつそ私に……というので、親類中で相談を極めて、とうとうあてがったのが今の旦那なの。

その頃ちようど高等中学校を卒業したので、ま、宅へ来てから、東京へ出て、大学へ入ろうという相談でね、もともと内の繋りにもなってもらわなきやあならないというんでさ、わざつと年の違ったのを貰ったもんだから、旦那は二十九で、私は十四。」

お貞は今吸子に湯をばささんとして、鉄瓶に手を懸けたる、片手を指折りて数えみつ。

「十五の違だね。もつとも晩学だとかいうので、大抵なら二十五六で、学士になるのが多いってね。」

「無論さ。」

と少年は傾聴しながら喙を容れたり。

お貞は煎茶を汲出だして、まず少年に与えつつ、

「何だか知らないけれど、御婚礼をした時分は、嬉しくもなく、恐くもなく、まるで夢中で、何とも思やしなかつたが、実はおじいさんと二人ばかりで、他所の人の居ない方が、御膳を頂く時やなんか、私や気が置けなくて可かつたわ。

変に気が詰まつて、他人の内へ泊にでも行ったようで、窮屈で、つまらなくツて、思つ

てみればその時分から旦那が嫌いだったかも知れないよ。でも大方甘やかされた癖で、我^わ儘^{がまま}の方が勝つたのであろうと思う。

そのうちお祖父さんも安心をなすつたせいとか、大層気分も好^よくなるし、いよいよ旦那が東京へたつというので、祝つてたたしたお酒の座で、ちつと飲^{のみ}ようが多かつたのがもとになつてね、旦那が発をしたそのおひるすぎに、お祖父様^{さん}は果敢^{はか}なくおなりなすつたのよ。私やもうその時は……」

とお貞は声をうるましたり。

五

「それからというものは、私はまるで気ぬけがしたようで、内の中でも一番薄暗い、三畳の室^まへ入つちやあ、どういふものだかね、隅の方へちやんと坐つて、壁の方を向いて、しくしく泣くのが癖になつてね、長い間治らなかつたの。そうこうするうち兎^こが出来たわ。

可笑^{おかし}いじゃないかねえ。」

お貞は苦々しげに打笑みたり。

「妙なものがころがり出してしまつてき、翌^{あくるとし}年の十月のことなのよ。」

と言懸けてお貞はもの案じ顔に見えたりしが、

「そうそう、芳ちゃん、まだその前^{さき}にね、旦那がき、東京へ行つて三月めから、毎月々々一枚ずつ、月の朔^{ついたち}日にはきつと写真を書いてね、欠かさず私に送つて寄来^{よこ}すんだよ。まあ、御深切様じやないかね。そのたんびに手紙がついてて、（いや今月は少し瘦^やせた）の、（今度は少し眼が悪い）の、（どうだ先月と合わせてみい、ちつとあ肥^{ふと}つて見えよう）なんて、言^{ことば}書^{がき}が着いてたわ。

私やお祖父さんのことばかり考えて、別に何にも良^さ人の事は思わないもんだから、ちよいと見たばかりで、ずんずん葛籠^{つづら}の裡^{なか}へしまいこんで打棄^{うちちや}つといたわ。すると、いつのことだツけか、何かの拍子、お友達にめつかつてね、

（まあ！ お貞さん、旦那様は飛んだ御深切なお方だねえ。）サ酷^{ひどく}く擦^{すく}つたもんだろうじやあないかえ。

それもそのはずだね。写真の裏に一葉^{ひとつ}々々、お墨附があつてよ。年、月、日、西岡時彦^{これらうつす}写^{これらうつす}之^{これらうつす}、お貞殿へさ。

私もつい口惜^{くやし}紛れに、（写真の儀はお見合せ下されたく、あまりあまり人につけても）

ツき。何があまりあまりだろう、可笑いね。そういつてやると、それツきりおやめになつたが、十四五枚もあつた写真を、また見られちゃあ困ると思つたがね、人にも遣られず、焼くことも出来ずさ、仕方がないから、一纏めにして、お持仏様の奥ン処へ容れておいてよ。毎日拜んだから可いではないかね。」

先刻に干したる湯呑の中へ、吸子の茶の濃くなれるを、細く長くうつしこみて、ぐつと一口飲みたるが、あまり苦かりしにや湯をさしたり。

少年はただ黙して聞きぬ。

お貞は口をうるおして、

「児が出来る、もうそのしくしく泣いてばかりいる癖はなくなつて、小児にばかり気を取られて、他に何にも考えることも、思うこともなくツて、ま、五歳六歳の時は知らず、そのしばらくの間ほど、苦勞のなかつた時はないよ。

すると、その夏の初の頃、戸外にがらがらと腕車が留つて、入つて来た男があつたの。沓腕に突立つて、案内もしないから、寝かし着けていた坊やを置いて、私が上り口に出で行つて、

(誰方) といつて、ふいと見ると驚いたが、よくよく見ると旦那なのよ。旦那は旦那だ

が、見違えるほど瘡やせていて、ま、それも可かいが妙めづな恰かつ好こうさ。

大きな眼鏡のね、黒磨くろずりでもつて、眉毛から眼へかけて、頬ほッぺたが半分隠れようとい
う黒眼鏡を懸けて、希代さね、何のためだろう。それにあのそれ呼吸器とかいうものを口
へ押おつけてさ、おまけに鬚ひげを生やしてるじやあないか。それで高帽子たかじやつぽで、羽織うゑがとい
と、縞しまの透綾すきやを黒に染返したのに、五三の何か縫着紋ぬいつけもんで、少し丈不足たけたらずというのを着て、
お召めいが、阿波縮あわぢぢみで、浅葱あさぎの唐縮緬とうちりめんの兵児帯へこおびをメ《し》めてたわ。

どうだい、芳さん、私も思わず知らず莞爾にっこりしたよ、これは帰つて来たのが嬉しいのよ
り、いつそその恰好おかしが可笑おかしかつたせいなのよ。

病気で帰つたというこつたから、私も心配をして、看病をしたがね、胃病だといので、
ちよいとは快よくならない。一月も二月も、そうさ、かれこれ三月ばかりもぶらぶらして、
段々瘡やせるもんだから、坊やは居るし、私もつい心細くなつて、そつと夜出掛よけちやあお
百度を踏んだのよ。するとね、その事が分つたかして、

(お貞、そんなに吾われを治なりたいか)ツて、私の顔を瞻みめるからね。何の気なしで、(はい、
あなたがよくなつて下さいませねば、どうしましょう、私どもは路頭みちづちに立たなければなり
ません。)と真実ほんとうの処ところをいつたのよ。

さあ怒つたの、怒らないのじゃあない。(それでは手前、活計くわしのために夫婦になつたか。そんな水臭い奴とは知らなんだ。)と顔の色まで変えるから、私は弱つたの、何のじやない、どうしようかと思つたわ。」

六

「(なぜ一所に死ぬとは言つてくれない。愛情というものは、そんな淡々あわあわしいものではない。)ツていうのさ。向うからそう出られちゃあ、こつちで何とも言いようが無いわ。

女郎や芸妓げいしやじゃあるまいし、そんな殺文句が謂いわれるものかね。でも、旦那の怒りようがひどいので、まあ、さんざあやまつてさ。坊やがかすがいで、まずそれツきりで治まつたがね、私やその時、ああ、執念深い人だと思つて、ぞツとして、それからというもの、何だか重荷を背負しよつたようで、今でも肩身が狭いようなの。

あとでね、あのそら先刻さつきいつた黒眼鏡ね、(烏蜻蛉からすとんぼ見たように、おかしいじやアありませんか。)と、病気が治つてから聞いたことがあつたよ。そうするとね、東京はからツ風で塵埃ほこりが酷ひどいから、眼を悪くせまいたための砂除すなよけだつていうの、勉強盛ぎかりなら洋燈ランプをカツ

カと、ともして寝ない人さえあるんだのに、そう身体ばかり庇ってちやあ、何にも出来やしないと思つたけれど、まさかそんなことをいえたものでもなし、呼吸器も肺病の薬というので懸けるんだツて。それからね、その髻がまた妙なさ。」

とお貞は少年の面を見て、

「衛生髻だとき、おほほ。分るかえ？ 芳さん。」

「何のこつた、衛生髻ツたつて分らないよ。」

「それはね。」

となお微笑みながら、

「ごうなのよ。何でも人間の身体に附属したものは、爪であろうが、垢であろうが、要らないものは一つもないとね、その中でも往來の塵埃なんぞに、肺病の虫がまぎつて、鼻なかへ飛込むのを、髻がね、つまり玄関番見たようなもので、喰留めて入れないんだツさ。見得でも何でもないけれど、身体のために生じたと、そういつたよ。だから衛生髻だわね。おほほほほ。」

お貞は片手を口にあてつ。少年も噴出だしぬ。

「いくら衛生のためだつて、あの髻だけは廃止ば可いなあ。まるで（ちよいとこさ）に肖

てるものを、髯があるからなおそつくりだ。」

お貞は眉を打顰めて、

「嫌だよ、芳さんは。（ちよいとこさ）はあんまりだわ。でも（ちよいとこさ）と言えはこないだ、小橋の上で、あの（ちよいとこさ）の飴屋に逢ったの。ちようどその時だ。桜に中の字の徽章の着いた学校の生徒が三人連で、向うから行き違つて、一件を見ると声を揃えて、（やあ、西岡先生。）と大笑をして行き過ぎたが、何のこつた知らんと、当座は気が着かずに居たつけがね。何だとき、学校じゃあ、皆がもう良人に、（ちよいとこさ）と謂う渾名を附けて、蔭じゃあ、そうとほか言わないそうだよ。」

少年は頭を掉れり。

「何の、蔭でいうくらいなら優しいけれど、髯がね、あの学校の雇になつて、はじめて教場へ出た時に、誰だっけか、（先生、先生の御姓名は？）と聞いたんだつて。するとね、ちようど、後れて溜から入つて来た、遠藤ツて、そら知つてるだろう。僕の処へもよく遊びに来る、肩のあがつた、武者修行のような男。」

「ああ、ああ、鉄扇でものをいう人かえ。」

「うむ、彼奴さ、彼奴がさ。髯の傍へずいと出て、席から名を尋ねた学生に向つて、（お

い、君、この先生か。この先生ならそうだ、名は チョイトコサ だ。」と謂ったので、組一統がわツと行って笑ツたつて、里見がいつか話したつけ。」

お貞は溜ためいきをもらしたり。

「嫌になつちまう！ じゃ、まるでのつけから安く踏まれて、馬鹿にされ切っていたんだね。」

「でもなかにやああ見えても、なかなか学問が出来るんだつて、そういつてる者もあるんだ。何しろ、教場へ出て来ると、礼式もないで、突然、ボウルドに問題を書出して、

(何番、これを。)

といったきり椅子にかかつて、こう、少しうつむいて、脇ひじをついて、黙っているツて。

呼ばれた番号の奴は災難だ。大きに下稽古したげいこなんかして行かなかろうものなら、面くらつ

て、(先生私には出来ません。)—と試つてみても返事をしない。そのままうちやつてお

くもんだから、しまいにはやあ泣声で、(私には出来ません、先生々々。)—と呼ぶと、顔も

動うごさなけりや、見向きもしないで、(遣つてみるです。)—というツきりで、取とり附つく島も何

にもない。それでも遣つてみても出来そうもない奴は、立ったり、居たり、ボウルドの

前へ出ようとして 中ちゆうもとり 戻もどりをしたり、愚ぐず図ず々々迷まよついでる間に、柝たたくが鳴つて、時間が済む

と、先生はそのまんまでファイと行ってしまっただって。そんな時あ問題を一つ見たばかりで、一時間まる遊び。」

七

「だから、西岡は何でも一方に超然として、考えていることがあるんだろう。えらい！
という者もあるよ。」

お貞は「何の。」という顔色。

「考えてるって、大方内のことばかり考えてて、何をしても手が附かないでいるんだろう。聞いて御覧、芳さんが来てからは、また考えようがいつそきびしいに相違ないから。何だ
って、またあの位、嫉妬深い人もないもんだね。」

前にも談した通り、旦那はね、病気で帰省をしてから、それなり大学へは行かないで、
ただぶらぶらしていたもんだから、沢山ないお金子も坐食の体でなくなるし、とうとう先
に居た家売って、去々年この家へ引越したの。

それでもまあ方々から口があつて、みんな相当で、悪くもなくって、中でも新潟県だっ

た、師範学校のね芳さん、校長にされたのよ。校長は可いけれど、私は何だか一所に居るのが嫌だから、金沢に残ることにして、旦那ばかり、任地へ行くようにという相談をしたが不可なくつて、とうとう新潟くんだりまで、引張り出されたがね。どういふものか、嫌で、嫌で、片時も居たたまらなくつてよ。金沢へ帰りたいたいで、例の持病で、気が滅入つちやあ泣いてばかり。

旦那が学校から帰つて来ても、出迎もせず俯向いちやあ泣いてるもんだから、

(ああ、またか。)となさけなそうに言つちやあ、しおれて書齋へ入つて行つたの。別につらあてというンじやあ決してなかつたんだけれど、ほんとうに帰りがかつたんだもの。

旦那もとうとう我を折つて(それじやあ帰るが可い、)というお許しが出ると、直ぐに元氣づいて、はきはきして、五日ばかり御膳も頂かれなかつたものが、急に下婢を呼んで、(直ぐ腕車夫を見ておいで。)さ、それが夜の十時すぎだから恐しいじやあないかえ。何だか狂人じみてるねえ。

旦那を残し、坊やはその時分五歳でね、それを連れて金沢へ帰ると、さっぱりしてその居心の可かつたつちやあない。坊もまた大變に喜んだのさ。

それがというと、坊やも乳児の時から父親にやあちつとも馴染まないで、少しもの

「ごころが着いて来ると、顔を見ちや泣出してね。草履を穿はいて、ちよこちよこ戸外おもてへ遊びに出るようになると、情なさけないじやあないかえ。家うちへ入ろうとしちやあ、いつでも外。戸どの隙すきからそツと透見すきみをして、小さな口で、かあちゃん おとっちゃん（母様、父様 家に居るの？）と聞くんだよ。

（ああ。）と返事をすると、そのまま家へ入らないで、もの欲ほしくなつた時分でも、また遊びに行つてしまつて、父様居ない、というと、いそいそ入つて来ちやあ、私が針仕事をしている肩かたへつかまつて。」

と声に力を籠こめたりけるが、追愛の情の堪え難かりけむ、ぶるぶると身を震わし、見る見る面の色激だして、突然長火鉢の上に蔽おほわれかかり、真白き雪の腕かひなもて、少年の頸うなじを搔かき、

「こんな風に。」

とものぐるわしく、真面目まじめになりたる少年を、惚ほれ惚ほれと打うちまもり、

「私の顔を覗のぞき込こんじやあ、おつかさん（母様）ツて、おつかさん（母様）ツて呼んでよ。」
お貞いたは太いたく激いたしおれり。

「そうしてね、おとっちゃん（父様）が居ないと可いねえ。」ツて、いつでも、そう言つたわ。」

言懸けてうつむく時、弛ゆるき前髪まへかみの垂れけるにぞ、うるさげに搔かき上あぐるとて、ようやく少年せうねんにからみたる、その腕かひなほじを解ほどきけるが、なお渠かれが手てを握にぎりつつ、

「そんな時ばかりじゃあないの。私わたしが何かくさくさすると、可こ哀あ相あに児こどもにあたつて、叱ひつち
咤かツて、押入おしこへ入れておく。あとで旦那だんなが留守くわうしゆになると、自分でそツと押入おしこから出て来
てね、そツと拔足はつそくかなんかで、私のそばへ寄よつて来きちやあ、肩越かたこに顔かほを覗のぞいて、（母おつかち
様やん、父様ちちさまが居いないと可いいねえ）ツさ。五歳いつつや六歳むつつで死しんで行いく児こは、ほんとうに賢さとしいの
ね。女の児こはまた格別かくべつ情愛じやうあいがあるものだよ。だからもう世よの中ちゆうがつまらなくツて、つまら
なくツて、仕様しやうががなかつたのを、児こどものせいで紛こまれていたがね、去年こぞ（じふてりや）で亡なく
なつてからは、私わたしやもう死しんでしまいたくツて堪たまらなかつたけれど、旦那だんなが馬鹿ばかにおとな
しくツて、かツと喧嘩けんかすることがないものだから、身投みなげに駈かけ出す機おりがなくなつて、ついぐ
ずぐずで活いきてたが、芳よしちゃん、お前に逢あつてから、私わたしや死しにたくななくなつたよ。」

お貞はいかに驚きしぞ、戸のあくともろともに器械のごとく刎ね上りて、夢中に上り口に出迎えつ。蒼くなりて瞳を据えたる、沓脱の処に立ちたるは、洋服扮装の紳士なり。頤細く、顔円く、大きき過ぎたる鼻の下に、賤しげなる八字髭の上唇を蔽わんばかり、濃く茂れるを貯えたるが、面との配合を過れり。眼はいと小さく、毗垂れて、あるかなきかを怪むばかり、殊に眉毛の形乱れて、墨をなすりたるごとくなるに、額には幾条の深く刻める皺あれば、實際よりは老けて見ゆべき、年紀は五十の前後ならむ、その顔に眼鏡を懸け、黒の高帽子を被りたるは、これぞ（ちよいとこさ）という動物にて、うわさせし人の影なりける。

良夫と誤り、良夫と見て、胸は早鐘を撞くごとき、お貞はその良人ならざるに腹立ちけむ、面を赤め、瞳を据えて、屹とその面を瞻りたる、来客は帽を脱して、恭しく一礼し、左手に提げたる革靴の中より、小き旗を取り出して、臆面もなくお貞の前に差出しつ。

「日本大勝利、万歳。」

と謂いたるのみ、顔の筋をも動かさで、（ちよいとこさ）は反身になり、澄し返りて控えたり。

渠がかくのごとくなす時は、二厘三厘思い思いに、その掌に投げ遣るべき金沢市中の通

おりもの
者 となりおれる 僥倖なる 漢なりき。

「ちよいとこ、ちよいとこ、ちよいとこさ。」

と渠は、もと異様なる節を附し両手を掉りて躍りながら、数年来金沢市内三百余町に飴を売りつつ往来して、十万の人一般に、よくその面を認められたるが、征清のことありしより、渠は活計の趣向を変えつ。すなわち先のごとくにして軒ごとを見舞いあるき、伶俐に米塩の料を稼ぐなりけり。

渠は常にもものいわず、極めて生真面目にして、人のその笑えるをだに見しものもあらざれども、式のごとき白痴者なれば、侮慢は常に嘲笑となる、世に最も賤まるる者は時としては滑稽の材となりて、金沢の人士は一分時の笑の代にとて、渠に二三厘を払うなり。

お貞はようやく胸を撫でて、冷かに旧の座に直りつ。代価は見てのお戻りなる、この滑稽劇を見物しながら、いまだ木戸銭を払わざるにぞ、(ちよいとこさ)は身動きだもせず、そのままそこに突立ちおれり。

ややありてお貞は心着きけむ、長火鉢の引出を明けて、渠に与うべき小銭を探すに、少年は傍より、

「姉さん、湯銭のつりがあるよ、おい。」

と板敷に投出せば、（ちよいとこさ）は手に取りて、高帽子を冠ると斉しく、威儀を正して出行きたり。

九

出行く（ちよいとこさ）を見送りて、二人は思わず眼を合しつ。

「なるほど肖にているねえ。」

とお貞は推出おしだすがごとくに言う。少年はそれには関せず。

「まあ、それからどうしたの？」

渠は聞くことに実の入りけむ、語る人を促うながせり。

「さあその新潟から帰った当座は、坊やも——名は環たまきといったよ——環も元気づいて、いそいそして、嬉しそうだし、私も日本晴にっぽんばれがしたような心持で、病気も何にもあつたもんじゃあないわ。野へ行く、山へ行くで、方々外出そとでをしてね、大層気が浮いて可い心持。

出来るもんならいつまでも旦那が居ないで、環と二人ツきり暮したかつたわ。

だがねえ、芳さん、浮世はままにならないものとは詮じ詰めたことを言つたんだね。二度旦那から手紙を寄越して、（奉公人ばかりじゃ、緊が出来ない、病気が快くなつたら直ぐ来てくれ。）と頼むようにいつて来てても、何の、彼のツて、行かないもんだから、お聞きよ、まあ、どうだろうね。行つてから三月も経たない内に、辞職をして歸つて来て、（なるほどお前なんぎ、とても住めない、新潟は水が悪い）ツさ。まあ！

するとまた環がね、どういうものか、はきはきしない、嫌にいじけツちまつて、悪く人の顔色を見て、私の十四五の時見たように、隅の方へ引込んであ、うじうじするから、私もつい気が滅入つて、癩癩が起るたんびに、罪もないものを……」

と涙を浮め、お貞はがツくり俯向きたり。

「その癖、旦那は、環々ツて、まあ、どんなに可愛がつたらう。頭へ手なんぎ思いも寄らない、睨める真似をしたこともなかつたのに、かえつて私の方が癩癩を起しちや、（母様）と傍へ来るのを、

（ええ、も、うるさいねえ、）といつて突飛ばしてやると、旦那が、（咎もないものをなげそんなことをする）てツて、私を叱るとね、（母様を叱つては嫌よ、御免なさい御免なさい）と庇つてくれるの。そうして、（あんな母様は不可のう、ここへ来い）と旦那

那が手でも引こうもんなら、それこそ大変、わッといつて泣出したの。

(あ、あ、)と旦那が大意をして、ふいと戸外へ出てしまうと、後で、そつと私の顔を見
ちやあ、さもさもどうも懐しそうに、莞爾と笑う。そのまた愛くるしさツちやあない。

私も思わず莞爾して、引ツたくるように膝へのせて、しつかり抱しめて頬をおツつけると、
嬉しそうに笑ツちやあ、(父様が居ないと可い)と、それまたお株を言うじやあない
かえ。

だもんだから、つい私もね、何だか旦那が嫌になつたわ。でも或時、

(お貞、吾も環にや血を分けたもんだがなあ。)とさも情なそうに言つたのには、私も堪
らなく気の毒だつたよ。

前世の敵同士でもあつたものか、芳さん、環がじふてりやでなくなる時も、私がやる
水は、かぶりつくようにして飲みながら、旦那が薬を飲ませようとすると、ついと横を向
いて、頭を掉つて、私にしがみついて、懐へ顔をかくして、いやいやをしたもんだから、
ついぞ荒い言をいっただこともない旦那が、何と思つたか血相を変えて、

(不孝者!)といつて、握拳で突然環をぶとうとしたから、私も屹となつて、片膝
立てて、

（何をするんです！）と摺寄すりよったわ。その時の形相かたぎの凄じすさまさは、ま、どの位であつたらうと、自分でも思い遣られるよ。言憎いにくいことだけれど、真実ほんとうにもう旦那を喰殺してやりたかつたわね。今でも旦那を環の敵かたきだと思ふもの。あの父親さえ居なけりや、何だつて環が死ぬものかね、死にやあしないわ、私ばかりの児こだつたら。」

お貞はしばらく黙したりき。ややあり思出したらんかのごとく、

「旦那はそのまま崩折くずおれて、男泣きに泣いたわね。

私やもう泣くことも忘れたようだった。ええ、芳さん、環がなくなつてから、また三度も方々へいい役に着いたけれども、金沢なら可いが、みんな遠所とおくなので、私はどういうものか遠所へ行くときりに金沢が恋しくなつて、帰りたい帰りたい一心でね、濟まないことだとは思つてみても、我慢がし切れないのを、無理に堪こたえると、持病が起つて、わけもないことに泣きたくなつたり、飛んだことに腹が立ったりして、まるで夢中になるものだから、仕方なしに帰つて来ると、旦那も後からまた帰る、何でも私をば一人で手放しておく訳にやゆかないと見えて、始終一所に居たがるわ。

だもんだからどこも良い処には行かれないで、金沢じゃ、あんなつまらない学校へ、腰弁当こしあてというしがない役よ。」

と一人冷かに笑うたり。

十

「何もそんなに気を揉まなくツても、よさそうなものを。旦那はね、まるで留守のことが気に懸るために出世が出来ないのだ、といつても可いわ。

そんな私を思ってくれるもんだから、夜遊はせず、ほんのこつたよ、夫婦になつてから以來、一晩も宅を明けたことなしさ。学校がひければ、ちゃんともう、道寄もしないで帰つて来る。もつとも無口の人だから、口じや何ともいわないけれど、いつもむずかしい顔を見せたことはなし、地体がくすぶつた何しろ、(ちよいとこさ)というのだから。それだが、眼が小さいからちつたああれでも愛嬌があるよ。荒い口をきいたことなし、すりや私だつて、嫌だ、嫌だとはいうものの、どこがといつちやあ返事が出来ない。けれども嫌だから仕様がないわ。

それだから私も、なに言うことに逆らわず、良人はやつぱり良人だから、嫌だつても良人だから、良人のように謹んで事えているもの。そう疑ぐるには及ばないじやあないかね。

芳さん、芳さんの姉様ねえさんがひどくされたようでも困るけれど、男はちったあ男らしく、たまには出歩行であるきでもしないとね、男に意気地いくじがないようで、女房の方でも頼母たのもしくなくなるのよ。

それを旦那と来た日にやあ、ちよいとの間でも家うちに居て、私の番をしていたがるんだわ。それも私が行届かないせいだろうと、気を着けちやあいるし、それにもう私は旦那の犠え牲だとあきらめてる。分らないながらも女の道なんてことも聞いてるから、浮気らしい真似もしないけれど、芳さん、あの人の弱点よわみだね。それがたぬに出世も出来ないなんといつた日にや、私やいつそ可哀相だよ。あわれだよ。

何の密夫まおとこの七人ぐらい、疾とつくに出来ないじやあなかつたが……」

といいかけしがお貞はみずからその言過しを恥じたる色あり。

「これは話さ。」

と口軽に言消して、

「何も見張つていたからつて、しようのあるもんじやあないわね。」

お貞は面晴おもて々しく、しおれし姿きりりとなりて、その音調も気競きおいたり。

「しかしね、芳さん、世の中は何という無理なものだろう。ただ式三献おさかずきをしたばかりで、

夫だの、妻だのツて、妙なものが出来上つてき。女の身体はまるで男のものになつて、何をいわれてもはいはいツて、従わないと、イヤ、不貞腐だの、女の道を知らないのと、世間でいろんなことをいうよ。

折角お祖父さんが御丹精で、人並に育つたものを、ただで我ものにしてしまつて、誰も難^{ありがた}有^がりもしないじやないか。

それでいて婦人^{おんな}はいつも下手^{したて}に就いて、無理も御道理^{ごもつとも}にして通さねばならないという、そんな勘定に合わないことツちやあ、あるもんじやない。どこかへ行こうといつたつて、良人がならないといえ、はい、起^たてといえ、はい、寝ろといわれりやそれも、はい、だわ。

人間一人^{にん}を縦にしようが、横にしようが、自分の好きなままにしておきながら、まだ不足^{すき}で、たとえば芳さんと談話^{はなし}をすることはならぬといわれりや、やっぱり快く落着いて談話も出来ないだらうじやないかね。

一体操を守れだの、良人に従えだのという、捉^{おきて}かなんか知らないが、そういったようなことを極^きめたのは、誰だと、まあ、お思^{おも}いだえ。

一遍婚礼をすりや疵^{きずもの}者だの、離縁^{さらわれ}るのは女の恥だのツて、人の身体^{からだ}を自由にさせない

で、死ぬよりつらい思いをしても、一生嫌な者の傍そばについてなくツちやあならないというのは、どういう理窟だろう、わからないじやないかね。

まさか神様や、仏様のおつげがあつたという訳でもあるまいがね。もともと人間がそういうことを拵こしらえたのなら、誰だつて同おんなじ一人間だもの、何密まおとこ夫こをしても可い、駈かけ落おちをしても可いと、言出した処で、それが通つて、世間がみんなそうなれば、かえつて貞女だの、節婦だの、というものが、爪つまはじきをされようも知れないわ。

旦那は、また、何の徳があつて、私を自由にするんだらう。すっかり自分のものにしてしまつて、私の身体からだを縛つたらうね。食べさしておくせいだといえ、私や一人で針仕事をして、くらしかねることもないわ。ねえ、芳さん、芳さんてばさ。」

少年は太いたくこの答に窮して、一言もなく聞きたりけり。

十一

お貞はなおも語勢強く、

「ほんとに虫のいい談話はなしじやないかね、それとも私の方から、良人になつて下さいって、

頼んで良人にしたものなら、そりやどんなことでも我慢が出来るし、ちつとも不足のあるもんじゃあないが、私と旦那なんざ、え、芳さん、夫にした妻ではなくって、妻にした良人だもの。何も私が小さくなつて、いうことを肯きいて縮んでゐる義理もなし、操を立てるにも及ばないじゃあないか。

芳さんだつてそうだわ。何もなかをよくしたからとつて、不思議なことはないじゃあないかね。こないだ騒さわぎが持上つて、芳さんがソレかけだ駈出した、あの時でも、旦那がいろいろむずかしくいうからね、（はい、芳さんとは姉きょうだい弟ぶん分ぶんになりました。どういう縁ゆかりだか知らないけれど、私が銀杏いちようがえし返かへに結むすつていますと、亡なつた姉ねえさん様さんに肖にてるつて、あの児も大層姉おもいだと見えまして、姉様々々あんなあんなつて慕あこがつてくれますもんですから、私もつい可愛かわいくなります。）と無理だとは言いわれないつもりで言いつたけれど、（他人で、姉弟あなといいうがあるものか）つて、真底まそこから了りよう簡けんしないの。傍そばに居いた伯父おじいさんも、伯母おばあさんも、やっぱりおんなじようなことを言いつて、（ふむ、そんなことで世よの中なかが通とるものか。言いようもあるものに、ナニ姉弟あな分ぶんだ。）とこうさ。口惜くやしいじゃあないかねえ。芳さん、たとい芳さんを抱かいて寝たからたつて、二人さえ潔白けつぱくなら、それで可かいじゃあないか、旦那が何と言いつたつて、私わたしやちつとも構かまやしないわ。」

お貞はかく謂えりしまで、血色勝れて、元氣よく、いと心強く見えたりしが、急に語調の打沈みて、

「しかしこうはいうものの、芳さん世の中というものがね、それじゃあ合点がってんしないとき。たとい芳さんと私とが、どんなに潔白であつたからつても、世間じゃそうとは思つてくれず、（へん、腹合せの姉弟だ。）と一万石きぬに極きめつちまう！ 旦那が悪いといつてもなく、私と芳さんが悪いのでもなく、ただ悪いのは世間だよ。

どんなに二人が潔白で、心は雪のように清くツてもね、泥足で踏みふにじつて、世間で汚くしてしまふんだわ。

雪といえは御覽な、冬になつて雪が降ると、ここの家うちなんざ、裏の地面はたけが畠はたけだからね、木戸があかなくツて困るんだよ。理窟おんなじを言えば同一おんなじで、垣根にあるだけの雪ならば、無理に推せば開あくけれど、ずツとむこうの畠はたけから一面に降りつづいて、その力が同一ひとつになつて、表からおすのなもの。どうして、何といわれても、世間にやあ口あが開あかないのよ。

男の腕うでなら知らないこと、女なんざそれを無理にこじあけようとすると、呼吸いきぎれ切きがしてしまうの。でも芳さんは士官になるというから、今に大将にでもおなりの時は、その力でいくらかも世間を負かしてしまつて、何にも言わさないうちに来きてもしようけれど、今とい

つちやあたつた二人で、どうすることもならないのよ。

それとも神様や仏様が、私だちの手伝をして、力を添えて下さりや可いけれど、そんな願ねがはかなわないわね。

婆ばばあ々々じみるツて芳さんはお笑いだが、芳さんなぞはその思おも遣いがあるまいけれど、可愛わいい児こでも亡なくして御覽、そりやおのずと後ご生しょうのことも思われるよ。

あれは、えらい僧正だつて、旦那の勧める説教を聞きはじめしてから、方々へ参詣まいつたり、教おしえを聞いたりするんだがね。なるほどと思うことばかり、それでも世の中に逆らツて、それで、御利益があるツてことは、ちつとも聞かしちやあくれないものを。

戸おを推おツつけてる雪のような、力の強い世の中に逆らツて行ゆこうとすると、そりや弱い方が殺されツちまうわ。そうすりやもう死ぬより他ほかはないじやないかね。

私ももうもう死んでしまいたいと思うけれど、それがまたそうも行ゆかないものだし、このごろじゃ芳さんという可愛いものが出来たからね、私や死ぬことは嫌になつたわ。ほんとうさ！ 自分の児が可愛いとか、芳さんとかうやつて談話はなしをするのが嬉しいとか、何でも楽たのみなことさえありや、たとい辛くツても、我慢が出来るよ。どうせ、私は意気地ななしで、世間に負けているからね、そりや旦那は大事にもする、病氣やまいが出るほど嫌な人でも、

世間よのなかにや勝たれないから、たとい旦那が思い切つて、縁を切ろうといつてもね、どんな腹いせでも旦那にさせて、私や、あやまつて出て行かない。」
と齒をくいしめてすすり泣きつ。

十二

お貞は幾年来独り思い、独り悩みて、鬱積うつせきせる胸中の煩悶はんもんの、その一片をだにかつて洩もらせしことあらざりしを、いま打明くることなれば、順序も、次第も前後して、乱れ且つ整わざるにも心着かで、再び語り続けたり。

「いつちや女の愚痴だがね。私はさつきいったように、世の中というものがあつて、自分ばかりじゃないからと、断念あきらめて、旦那に事つかえてはいるけれど、一日に幾度となく、もうふつふつ嫌になることがあるわ。

芳さんも知つておいでだ。ついこないだのことだつて、晩方旦那の友達が来たので、私もその日は朝ツから、塩梅あんばいが悪くツて、奥の室まに寝ていた処へ、推懸おしかけたもんだから、外に別に部屋はなし、ここへ出て坐つていたの。

お客がまた私の大嫌な人で、旦那とは合口だもんだから、愉快そうに話してたツけが、私は頭痛がしていた処へ、その声を聞くとなお塩梅が悪くなつて、胸は痛む、横腹は筋張るね、おいおい薄暗くはなつて来る。暑いといふので燈火はつけずさ。陰気になつて、いろんなことを考え出して、つい堪らなくなつたから、横になろうと思つても、直ぐ背後に居るんだもの、立膝も出来ないから、台所へ行つて板の間にでもと思つたが、あすこにや蚊が酷いし、仕方がないから戸外へ出て、軒下にしゃがんで泣いてた処へ、ちようどお前さんが来ておくれで、二階へ来いとおいいだから、そつと上ると、まあ、おとしよりが御深切に、胸を押して下すつたので、私やもう難有くツて、嬉しくツて、心じや手を合せて拝んだわ。

おかげでやつと胸が開きそうになつて、ほつと呼吸をついた処へ、
(貞はそこに参つておりましような。)と、壇階子の下へ来て、わざわざ旦那が呼んだじやあないかね。

私やあんまりくさくさしたから、返事もしないで黙つていると、おばあさんがお聞きつけないすツて、

(階下へおいで、ね、ね、そうしないと悪い)ツて、みんなもうちゃんと推量して、やさ

しく言つて下さるんだもの。

(ここに居とうございます!)と、おばあ様の膝に縫りついたの。

下ではなお呼ぶもんだから、おばあさんが私のかわりに返事をなすつて、

(可いから、可いから。)と、低声でおっしゃつてね、背を撫でて下さるもんだから、仕方なしに下りて行くと、お客はもう帰つていてね、嫌な眼で睨まれたよ。

空いてる室がないもんだから、そういう時には困つちまう。アレ悪く取つちやあ困るわね。

何も芳さんに二階を貸しておいて、こういっちやあわるいけれど、はじめツからこの家は嫌いなもの。

水は悪いし、流元なんぎ湿地で、いつでもじくじくして、心持が悪いつちやあない。

雪どけの時分になると、庭が一杯水になるわ。それから春から夏へかけては李の樹が、毛虫で一杯。

それに宅中陰気でね、明けておくと往来から奥の室まで見透しだし、ここいら場末だもんだから、いや、あすこの宅はどうしたの、こうしたのと、近所中で眼を着けて、晩のお菜まで知つてるじゃあないかね。大嫌な猫がまた五六疋、野良猫が多いので、その

そ入つて、ずうずうしく上り込んで、追つてもにげるような優しいんじやない。

隣の小猫はまた小猫で、それ井戸は隣と二軒で使うもんだから、あすこの隔へだてから入つて来ちやあ、畳でも、板の間でも、ニヤアニヤア鳴いて歩ある行くわ。

隣の猫のこつたから、あのまた女房おかみが大抵じやないのだからね、(家の猫を)なんて言われるが嫌さに、打ぶつわけにはもとよりゆかず、二三度干物でも遣つたものなら、可いことにして、まつわつて、からむも可いけれど、芳さん、ありや猫の疱瘡ほうそうとでもいうのかしら。からだじゆう一杯のできもので、一々膿うみをもつて、まるで、毛が抜けて、肉があらわれてね、汚なくつて手もつけられないよ。それがさ、昨夜ゆうべも蚊帳かやの中へ入込んで、寝ていた足をなめたのよ。何の因果いんぐわだか、もうもう猫にまで取と着つかれる。」

と投なぐるがごとく言いすてつ。苦にが笑わらして眩つぶやきたり。
「ほんとうに泣なくわらい笑わらだねえ。」

十三

お貞こつとばの言途絶ことばえたる時、先刻さつきより一言ひとことも、ものいわで渠かれが物語を味あじいつつ、是非せいひの分

別にさまよえりしごとき芳之助の、何思いけん呵々々と笑い出して、

「ははは、姉様ねえさんは陰弁慶だ。」

お貞は意外なる顔色かおつきにて、

「芳さん、何が陰弁慶だね。」

「だってそんなに決心をしていながら、一体僕の分らないというのはね、人ががらりと戸を明けると、眼に着くほどびつくりして、どきり！ する様子が確たしかに見えるのは、どういうものだろう。髯ひげの留守に僕と談話はなしでもしている処へ唐突だしぬけに戸外おもてがあげば、いま姉様がいった世間よのなかの何とかで、吃驚びつくりしないにも限らないが、こうしてみるに、なにもその時にや限らないようだ。いつでもそうだから可笑おかしいじゃないか。それに姉様のは口でいうと反対で、髯ひげの前じやおどおどして、何だか無暗むやみに小さくなつて、一言ものをいわれても、はツと呼吸いきのつまるように、おびえ切っている癖に。今僕に話すようじや、酸いも、甘いも、知つていて、旦那を三銭さんもんとも思つてやしない。僕が二厘の湯銭の剩銭つりで、（ちよいとこさ）を追返したよりは、なお酷ひどく安くしてるんだ。その癖、世間じや、（西村の奥様は感心だ。今時の人のようでない。まるで嫁にきたてのように、旦那様を大事にする。婦お人はああ行ゆかなければ嘘だ。貞女の鑑かがみだ。しかし西村には惜おしいものだ。）なんとそう言つ

てるぞ。そうすりや世間も恐しくはなかるうに、何だつて、あんなにびくびくするのかなあ。だから姉様は陰弁慶だ。」

と罪もなくけなしたるを、お貞は聞きつつ微笑ほほえみたりしが、ふと立ちて店いで行ゆき、往来わらいの左右ながを視ながめ、旧もとの座まに帰かえりて四辺あたりをみまわし、また板敷いたぢに伸上のびありて、裏庭うらにわより勝手かたてなどを、巨細こさいに見みて座まに就つきつ。

「それはね、芳さん、こうなのよ。」

という声もハヤふるえたり。

「芳さんだと思つて話すのだから、そう思つて聞いておくれ。」

私はね、可よいかい。そのつもりで聞いておくれ。私はね、いつごろからという確たしかなことは知らないけれど、いろんな事かさなが重かさり重かさりしてね、旦那だんなが、旦那だんなが、どうにかして。

死しんでくれりやいい。死しんでくれりやいい。死しねばいい。死しねばいい。

とそう思うようになっただよ。ああ、罪つみの深い、呪のろ詛ろうのも同おんなじ一ひとだ。親かたきの敵かたきでもあることか、人並ひとならより私わたしを思おもつてくれるものを、（死しんでくれりやいい）と思おもうのは、どうした心得こころえ違ちがいだろうと、自分で自分を叱なぐつてみても、やっぱりどうしてもそう思うの。

その念おもいが段々こ嵩こじて、朝あから晩ゆまで、寝ねてからも同おんなじ一ひとことを考かんえてて、どうしてもそ

の了簡りょうけんがなならないで、後暗いことはないけれど、何なんに着け、彼かに着け、ちよつとの間もその念おもいが離れやしない。始終そればかりが気にかかつて、何をしても手に着かないしね、じつと考えこんでいる時なんざ、なおのこと、何にも思わないでその事ばかり。ああ、人の妻の身で、何たる恐しい了簡だろうと、心の鬼に責められちやあ、片時も気がやすまらないで、始終胸がどきどきする。

それがというと、私の胸にあることを、人に見付かりやしまいかと、そう思うから恐怖こわいんだよ。

わけても、旦那に顔を見られるたびに、あの眼が、何だか腹の中まで見透みすかすようで、おどおどしずによいられない。(貞)ツて一声呼ばれると、直ぐその、あとの句が、(お前、おれ吾の死ぬのが待遠いだろう。)とこう来るだろうと思うから、はつとしないじやいられないわね。それで何ぞ外のことを言われると、ほつと気が休まって、その嬉しさつちやないもんだから、用でも、何でも、いそいそする。

それにこうやって、ここへ坐つて、一人でものを考えてる時は、頭の中で、ぐるぐるぐるぐる、(死ぬば可い)という、鬼か、蛇じゃか、何ともいわれない可恐こわいものが、私の眼にも見えるように、眼前めまへに駈かけまわっているもんだから、自分ながら恐しくつて、観音様を念じ

ているの。そこへがらりと戸を開けられちゃあ、どうして慌てずにいられよう。（ああ、めッかった。）と、もう死んだ気になっちまう！

それが心配で、心配で、どうぞして忘れたいと思うから、けもないことにわあわあ騒いだり、笑ったり、他所よそめには、さも面白そうに見えようけれど、自分じゃ泣きたいよ。あとではなおさら気がめいって、ただしよんぼりと考え込むと、また、いつもの（死ねばいい）が見えるようなの。

恐しくってたまらないから、どうぞこの念がなくなりますようにと、観音様に願っても、罪が深いせいなのか、段々強くなるばかり。

気のせいか知らないけれど、旦那は日に日に血色が悪くなって、次第に弱って行く様子、こりや思いが届くのかと考えると、私やもう居ても起たつても堪たまらない。

だから旦那が煩いでもすると、ハツと思つて、こりやどうでも治さないと、私が呪詛のろい殺すのだと、もうもうささほどもない病氣でも、夜よの目も寝ないで介抱するが、お医者様のお薬でも、私の手から飲ませると、かえつて毒になるようで、何でも半日ばかりの間は、今にも薬の毒がまわつて、血でも吐きやしないかしらと、どうしてその間の心配というものは！でもそれでもやっぱり考えることといつたら、ちつとも違ちがいはない、（死ねば可い

。で、早くなおって欲しいのは、実は（死ねば可い。）と思うからだよ。

ねえ、芳さん分つたろう。もう胸が一杯で、口も利かれやしないから、後生だ、推量しておくれ。も、私や、私はもう芳さんどうしたら可いんだねえ。」

と身を震わしたるいじらしさ！

お貞がこの衷情ちゆうじように、少年は太く動いたかされつ。思わず暗涙なみだを催したり。

「ああ姉様は可哀いけなそうだねえ。僕が、僕が、どうかしてあげようから、姉さん死んじゃあ不可いけないよ。」

お貞は聞きて嬉しげに少年の手をじつと取りて、

「嬉しいねえ。何の自害じがいなんかするもんかね、世間と、旦那として私をこんなにいじめるもの。いじめ殺されて負けちや卑怯ひきようよ。意気地が無いわ。可いよ、そんな心配は要らないよ。私や面つらあてにでも、活いきている。たといこの上幾十倍のつらい悲しいことがあつても、きつと堪こらえて死にやあしないわ。と心強こころくはいつても、死なれないのが因果いんぐわなのだねえ。」

ほろりとして見る少年の眼にも涙を湛たえたり。時に二階より老女の声。

「芳や、帰つたの。」

「あれ、おばあさんが。」

「はい、唯今。」

十四

二段ばかり少年は壇階子を昇り懸けて、と顧みて驚きぬ。時彦は帰宅して、はや上あがり口の処ぐちに立てり。

我が座を立ちしと同時にならむ。と思ふも見るもまたたくま、さそくの機転、下を覗のぞきて、
「もう、奥様おくさん、何時なんどきです。」

「は。」

とお貞は起たちたるが、不意に顛倒てんどうして、起ちつ、居つ。うろうろ四辺あたりを見廻す間に、
時彦は土間に立ちたるまま、肅然として帯の間より、懐中時計を取とり出し、丁寧うちながに打視うちながめて、少年を仰ぎ見んともせず、

「五十九分前六時です。」

「憚はばかりさま様。」

と少年は登音高く二階に上れり。

時彦は時計を納めつ。立ちも上らず、坐りも果てざる、妻に向いて、沈める音調、

「貞、床を取つてくれ、気分が悪いじや。貞、床をとつてくれ、気分が悪いじや。」
 おもて
 面は死灰のごとくなりき。

十五

時彦はその時よりまた起たず、肺結核の患者は夏を過ぎて病勢募り、秋の末つ方に到りては、恢復の望絶果てぬ。その間お貞が尽したる看護の深切は、實際隣人を動かすに足るものなりき。

渠は良人の容体の危篤に陥りしより、ほとんど一月ばかりの間帯を解きて寝しことあらず、分けてこのごろに到りては、一七日いまだかつて瞼を合さず、渠は茶を断ちて神に祈れり。塩を断ちて仏に請えり。しかれども時彦を嫌悪の極、その死の速かならんことを欲する念は、良人に薬を勧むる時も、その疼痛の局部を擦る隙も、須臾も念頭を去りやらず。甚しいかなその念の深く刻めるや、おのが幾年の寿命を縮め、身をもて神仏の贄に

供えて、合掌し、瞑目して、良人の本復を祈る時も、その死を欲するの念は依然として信仰の靈を妨げたり。

良人の衰弱は日に著けきに、こは皆おのが一念よりぞと、深更四隣静まりて、天地沈々、病者のために洋燈を廃して行燈にかえたる影暗く、隙間も風もあらざるにぞ、そよとも動かぬ灯影にすかして、その寂たること死せるがごとき、病者の面をそと視めて、お貞は顔を背けつつ、頤深く襟に埋めば、時彦の死を欲する念、ここぞと熾に燃立ちて、ほとんど我を制するあたわず。そがなすままに委しおけば、奇異なる幻影眼前にちらつき、※と火花の散るごとく、良人の膚を犯すごとに、太く絶え、細く続き、長く幽けき呻吟声の、お貞の耳を貫くにぞ、あれよあれよとばかりに自ら恐れ、自ら悼み、且つ泣き、且つ怒り、且つ悔いて、ほとんどその身を忘るる時、

「お貞。」

と一声、時彦は、鬱し沈める音調もて、枕も上げで名を呼びぬ。

この一声を聞くとともに、一桶の氷を浴びたるごとく、全身の血は冷却して、お貞は、

「はい。」

と戦きたり。

時彦はいとももの静しずかに、

「お前、このごろから茶を断ツたな。」

「いえ、何も貴下あなた、そんなことを。」

と幽かにいいて胸を圧おさえぬ。

時彦は頤おとがのあたりまで、夜着の襟深く、仰向あおむけに枕して、眼細まぼそく天井を仰ぎながら、

「塩断しおだちもしてるようだ。一昨日おとといあたりから飯も食べないが、一体どういう了りようけん簡かんじゃ

。」

(貴下を直したいために)といわんは、渠の良心の許さざりけむ、差俯さしうつむ向きむてお貞は黙しぬ。

「あかりが暗い、搔立かきたてるが可い。お前が酷ひどく瘡やせツこけて、そうしよんぼりとしてる処は、どう見ても幽霊のようじゃ、行燈あんどんが暗いせいだろう。な。」

「はい。」

お貞は、深夜幽霊の名を聞きて、ちりけもとより寒さを感じつ。身震いしながら、少しく居寄りて、燈心の火を搔立てたり。

「そんなに身体からだを弱らせてどうしようという了簡りようかんなんか。うむ、お貞。」

根深く問うに包みおおせず、お貞はいとも小さき声にて、

「よく御存じでございます。」

「むむ、お前のすることは一々吾や知つとるぞ。」

「え。」

とお貞はずり退りぬ。

「茶断、塩断までしてくれるのに、吾はなぜ早く死なんのかな。」

お貞は聞きて興覚顔なり。

時彦の語気は落着けり。

「疾く死ねば可いと思うておつて、なぜそんな真似をするんだな。」

と声に笑いを含めて謂えり。お貞はほとんど狂せんとせり。

病者はなおも和かに、

「何、そう驚くにや及ばない。昨日今日にはじまったことではないが、お貞、お前は思ったより遙に恐しい女だな。あれは憎い、憎い奴だから殺したいということなら、吾も了簡のしようがあるが、（死んでくれりや可い。）は実に残酷だ。人を殺せば自分も死なねばならぬというまづ世の中に定規があるから、我身を投出して、つまり自分が死んでかかっ

て、そうしてその憎い奴を殺すのじや。誰一人生命を惜まぬものはない、生きていたいというのが人間第一の目的じやから、その生命を打棄ててかかるものは、もう望を絶つたもので、こりや、隣むべきものである。

お前のはそうじやあない。(死んでくれりや可い)と思うので、つまり精神的に人を殺して、何の報も受けないで、白日青天、嫌な者が自分の思いで死んでしまった後は、それこそ自由自在の身じやでの、仕たい三昧、一人で勝手に榮耀をして、世を愉快く送ろうとか、好な芳之助と好いことをしようとか、怪しからんことを思っている、つまり希望というものがお前にあるのだ。

人の死ぬのを祈りながら、あとあとの樂みを思っている、そんな太い奴があるもんか。
おれ
吾はきつと許さんぞ。

そうそう好なまねをお前にされて、吾も男だ、指を啣えて死にはしない。
といつも思っていたんだが、もうこの肺病には勝たれない、いや、つまり、お前に負けたのだ。

してみれば、お貞、お前が呪詛殺すんだと、吾がそう思っても、仕方があるまい。
吾はどのみち助からないと、初手ツから断念めてるが、お貞、お前の望が叶うて、後で

天下晴はれたのしに楽たのしみまれるのは、吾はどうしても断念められない。

謂うと何だか、女々しいようだが、報のない罪をし遂げて、あとで楽たのしみしようという、虫の可いことは決して無い。またそうさせるような吾でもない。

お貞、謝罪わびをしちやあ可いかんぞ。お前は何も謝罪をすることもなし、吾も別に謝罪を聞く必要も認めんじや。悪かったというて謝罪をすればそれで済む、謝罪を聞けば了簡すると、そんな気楽なことを思うと、吾のいうことが分るまいでな。何でもしたことには、それ相当の報酬むくいというものが、多くもなく、少なくもなく、ちょうど可いほどあるものだと、そう思つてろ！ 可いか、お貞、……お貞。」

と少し急せぎ込みて、絶え入るばかりに咽むせびつつ、しばらく苦痛を忍びしが、がらがらと血を吐きたり。

いつもかかることのある際には、一ひとかたな 刀浴びたるごとく、蒼あおくなりて縊すがり寄りし、お貞は身みうごき動うごきだもなし得えざりき。

病者は自ら胸むねを抱いだきて、眼まなこを瞑ねむること良久ひさしかりし、一ひとときわ 際きわ声こゑの嗶からびつつ、

「こう謂えばな、親を蹴殺けころした罪人でも、一応は言訳をすることが出来るものをと、お前は無念に思うであろうが、法廷で論ずる罪は、囚徒が責任を負つてるのだ。

今お前が言訳をして、今日からどんな優しい気になろうとも、とても助からない吾に取つては、何の利益も無いことで、死んでしまえば、それ、お前は日本晴で、可いことをして楽しむじや。そううまくはきつとさせない。言訳がましいことを謂うな。聞くような吾でもなし。またお前だつてそうだ。人殺ひところしよりなおひどい、（死んでくれれば可い）と思うほどの度胸のある婦人おんなでないか。しつかりとしろ！ うむ、お貞。」

お貞は屹きつと顔を上げて、

「はい、決して申訳はいたしません。」

といと潔よく言放てる、両の瞳の曇は晴れつ。旭きよっこう光 一射霜を払いて、水仙たちまち凜りんとせり。

病者は心地好よげに領うんきぬ。

「可よし、よく聞け、お貞。人の死ぬのを一日待に待ち殺して、あとでよい眼を見ようというはずのいことだ。考えてみる。お前は今までに人情の上から吾に数え切れない借があるう。それをな、その負債をな。今吾に返すんだ。吾はどうしても取ろうというのだ。」

いと恐しき声にもおじず、お貞は一膝乗のり出いだして、看病疲れに繕えもんわざる、乱れし衣紋えもんを繕えもんいながら、胸を張りて、面おもてを差向け、

「旦那、どうして返すんです。」

「離縁しよう。いまここで、この場から離縁しよう。死にかかっている吾を見棄てて、芳之助と手を曳ひいて、温泉へでも湯治に行ゆけ。だがな、お前は家附の娘だから、出て行くことが出来ぬと謂いえば、十二出て行くには及ばんから、床ずれがして寝返りも出来ない、この吾を、芳之助と二人で負おぶつて行つて、姨捨山おほすてやまへ捨てるんだ。さ、どちらでも構かまわない。ただ、（人の妻たる者が、死にかかつてる良人を見棄てた。）とこういうことが世間へ知れて、世の中の者がみんなその気でお前に附合あえば、それで可い、それで可い。ちつとは負債おんが返せるのだ。」

しかし、これはお前には出来ぬこつた。お前は世間体というものを知ってるから、平生、吾が健全たつしやな時でも、そんな事は嘸おくびにも出さなほほどだ。それが出来るくらいなら、もう疾とつくに離別わかれてしまったに違ちがいない。うむ、お貞、どうだ、それとも見棄てて、離縁りえんが出来るか。」

お貞は一思案にも及ばずして、

「はい、そんなことは出来ません。」

病者さまはさもこそと思おもえる状さまなり。

「それではお貞、お前の念いで死なないうちに、……吾を殺せ。」
と静にいう。

「え、貴下を！」

「うむ、吾を。お貞、ずるい根性を出さないで、表向に吾を殺して、公然、良人殺しの罪人になるのだ。お貞、良人殺の罪人になるのだ。うむお貞。」

吾を見棄てるか、吾を殺すか、うむ、どちらにするな。何でも負債を返さないでは、あんまり冥利が悪いでないか。いや、ないかどころでない！ そうしなけりや許さんのだ。うむ、お貞、どっちにする、殺さないと、離縁にする！」

といと厳かに命じける。お貞は決する色ありて、

「貴下、そ、そんなことを、私にいつてもいいほどのことがあるんですか。」

声ふるわして屹と問いぬ。

「うむ、ある。」

と確乎として、謂う時病者は傲然たりき。

お貞はかの女が時々神経に異変を来して、頭あたかも破るがごとく、足はわななき、手はふるえ、满面蒼くなりながら、身火烈々身体を焼きて、恍として、茫として、ほとん

ど無意識に、されど深長なる意味ありて存するごとく、満身の気を眼にこめて、その瞳をも動かさず、じつと人を目詰むれば他をして身の毛をよだたすことある、その時と同一容体にて、目まじろぎもせで、死せるがごとき時彦の顔を瞻りしが、俄然、崩折れて、ぶるぶると身震いして、飛着くごとく良人に縋りて、血を吐く一声夜陰を貫き、

「殺します、旦那、私はもう……」

とわつとばかりに泣出しぎま、擲たれたらんかのごとく、障子とともに僵れ出でて、衝と行き、勝手許の暗を探りて、渠は得物を手にしたり。

時彦はじめのごとく顔の半ばに夜具を被ぎ、仰向に寝て天井を眺めたるまま、此方を見向かんともなさずして、いとも静に、冷かに、着物の袖も動かさざりき。

諸君、他日もし北陸に旅行して、ついでありて金沢を過りたまわん時、好事の方々心あらば、通りがかりの市人に就きて、化銀杏の旅店？と問われよ。老となく、少となく、皆直ちに首肯して、その道筋を教え申さむ。すなわち行きで一泊して、就褥の後に御注意あれ。

間広き旅店の客少なく、夜半の鐘声森として、凄風一陣身に染む時、長き廊下の最端に、蹶然たる足音あり寂寞を破り近着き来りて、黒きもの颯とうつる障子の外なる

幻影の、諸君の寢息を覗うあらむ。その時声を立てられな。もし咳をだにしたまわば、怪しき幻影は直ちに去るべし。忍びて様子をうかがいたまわば、すつと障子をあくると共に、いちようがえし うしろむき銀杏返の背向に、あとあし下りに入り来りて、諸君の枕辺に近づくべし。その瞬時真白なる細き面影を一見して、思わずしやうぜん悚然としたまわんか。トタンに件の幽霊はあんどん行燈の火を吹消して、暗中を走るあしおと登音、遠く、遠く、遠くなりつつ、長き廊下の尽頭に至りて、そのままハタと留むべきなり。

夜はいよいよ更けて、風寒きに、怪者の再来を慮りて、諸君は一夜を待明かさむ。

明くるを待ちて主翁に会し、就きて昨夜の奇怪を問われよ。主翁は黙して語らざるべし。再び聞かれよ、強いられよ、なお強いられよ。主翁は拒むことあたわずして、しゆうぜん愁然としてその実を語るべきなり。

聞くのみにてはあき足らざらんか、主翁に請いて一室に行け。密閉したる暗室内に俯向ひとま ゆき伏したる銀杏返の、その背と、裳の動かずして、あたかもなきがらのごとくなるを、ソト戸の透より見るを得べし。これ蓋し狂者の挙動なればとて、公判廷より許されし、良人を殺せし貞婦にして、旅店の主翁はその伯父なり。

されど室内に立入りて、その面を見んとせらるるとも、主翁は頑として肯せざるべし。

諸君涙あらば強うるなかれ。いかんとなれば、狂せるお貞は爾来世の人に良人殺しの面を見られんを恥じて、長くこの暗室内に自らその身を封じたるものなればなり。渠は恐懼て日光を見ず、もし強いて戸を開きて光明その膚に一注せば、渠は立 処に絶して万事休まむ。

光を厭うことかくのごとし。されば深更一縷の燈火をもお貞は恐れて吹消し去るなり。渠はしかく活きながら暗中に葬り去られつ。良人を殺せし妻ながら、諸君請う恕せられよ。あえて日光をあびせてもこの憐むべき貞婦を射殺すなかれ。しかれどもその姿のみ見て面を見ざる、諸君はさぞ本意なからむ。さりながら、諸君より十層二十層、なお幾十層、ここに本意なき少年あり。渠は活きたるお貞よりもむしろその姉の幽霊を見んと欲して、なお且つしかするを得ざるものをや。

明治二十九（一八九六）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日発行

初出：「文芸倶楽部」

1896（明治29）年2月

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年7月3日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

化銀杏

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>